

からこそ生きて来られた
を試して味方してくれた

対談
リレー



西村和子氏

知音俳句会 代表、俳人協会 理事

昭和23年、横浜に生まれる。昭和41年、「慶大俳句」に入会、清崎敏郎に師事。平成8年、行方克巳と「知音」創刊、代表。句集『夏帽子』（俳人協会新人賞）『窓』『かりそめならず』『心音』（俳人協会賞）『鎮魂』『季題別西村和子句集』『椅子ひとつ』。著書『虚子の京都』（俳人協会評論賞）『添削で俳句入門』『季語で読む源氏物語』『俳句のすすめー若き母たちへ』『気がつけば俳句』『子どもを詠う』『季語で読む枕草子』。共著『名句鑑賞読本』茜の巻・藍の巻、『秀句散策』。

少女時代に出逢った石川啄木の素敵な短歌

ロマンチックな詩は自然に覚えられ

やがて定型詩に魅せられて

毎回掲載される投稿俳句を褒められる

幸せな出逢いによって育てられ

俳句への強い愛情と夫の深い理解で開花する

自分を支え慰める俳句があった 17音の小さな宝 俳句の神様が私



伊勢真一氏

ドキュメンタリー映像作家

1949年東京生まれ。『奈緒ちゃん』『えんとこ』をはじめ、数多くのヒューマンドキュメンタリーを製作。『風のかたち』文化庁映画賞・カトリック映画賞受賞。『大丈夫。』キネマ旬報文化映画第1位、『傍（かたわら）～3月11日からの旅～』キネマ旬報文化映画第6位。2012年日本映画ペンクラブ功労賞、2013年度シネマ夢倶楽部賞受賞。近作は『シバ 縄文犬のゆめ』（2013年）、『妻の病 -レビー小体型認知症-』（2014年）、『ゆめのほとり -認知症グループホーム 福寿荘-』（2015年）、『いのちのかたち -画家・絵本作家 いせひでこ-』（2016年）。最新作は『やさしくなあと～奈緒ちゃんと家族の35年～』（キネマ旬報文化映画第3位）。

分かってくれる人の心に届けば嬉しうと
時を超越する言葉の素晴らしさ
何百年に亘っても未だ尽きず新しい作品が生まれ
日本文化の誇りに思える詩形のひとつ
人生のステージでその時しか詠めない句がある
心の中の風景あるがままを五七五に込めて

この町に生くべく日傘 購ひにけり

俳句と映像の持つ

「ものがたり」性

伊勢 今日日は、個人的に親しくさせていただいている俳人の西村和子さんにお声をかけさせていただきました。初めてお会いしてから10年近くになりますね。

西村 私が選者として出演していたNHKの俳句の番組に、ゲストとして来て頂いたのが最初でした。共通の友人である小児科医の細谷亮太さんのご紹介で、映画『風のかたち』が完成する頃でしたね。

伊勢 そう、「NHKの番組に出演したら少しは映画の宣伝になるかもしれないから」と言われて(笑)。俳句はやったことがないけど、私は映画が俳句ですから。

西村 番組の前に『風のかたち』の試写を拝見して「とても俳句的な映画だ」と思いました。一切説明しないし、ナレーションも言葉を最小限に惜しんで、季節の移ろいがかかる様なカットがいたる所にあつて、「俳句に

興味がある方なのかな」と思ったんですが・・・現実の切り取り方、描き方、前面に主張を押し出さず「観て分かつてくれる人に分かつてもらえればいい」という創り方は、俳句と似ています。それ以降、伊勢さんの作品は殆ど観ていますよ。

伊勢 上映後のトークゲストとして「映画と俳句について」話してくれたり、暗い中でメモを取りながら本当にしっかりと観てくれて、「ここここが俳句」とか言ってくれますね(笑)

西村 全く意識しないで撮っていても「この映画にはこれだけ季語がありましたよ」と。

伊勢 テレビは分かり易くストーリーに伝えたいことを伝えるメディアで、映画は暗い中で観るから「自分の世界で観る」というところがあつて、具体的に伝えるというより作品に触れることで観る人それぞれが考えを深める感じがします。逆に西村さんの俳句も、とても映画的だなと思ったりするわけです。

西村 そうですか。

伊勢 表現として近いのではないのでしょうか。セルゲイ・エイゼンシュテインというモンタージュ理論を考えたロシアのドキュメンタリー映画の父の様な監督がいるのですが、彼の本を讀むと「古池や 蛙とびこむ 水の音」という芭蕉の俳句がモンタージュの基本であるという様なことが書いてあります。「古池や」と全景から、「蛙とびこむ」というアップを見せて、「水の音」という余韻を残す、と。

西村 聴覚に訴えているんですね。伊勢 そういう面で「日本の俳句は素晴らしい、とても映画的であり、更にはドキュメンタリーの魅力を伝えている」と言う様なことが書いてあります。今や、エイゼンシュテインやモンタージュ論等を知っている人は少ないかもしれないけど、映画が生まれて間もない頃に、俳句の魅力に気づいていた映画人が、ロシアにいたというのはすごいよね。

西村 いつ頃の人ですか？

伊勢 ロシア革命の前後の頃、1948年没(享年50歳)で映画の制作をはじめたのは1924年だと思えます。映画自体がまだ100年ちょっとの歴史しかないし、それこそ

映画をプロパガンダとして使ったりもしていたわけですよ。映画の理論的なことをちゃんと考えたというのは、おそらくエイゼンシュテインとかその頃の人が最初じゃないでしょうか。番組の出演依頼の時は、エイゼンシュテインのことを全部知っているわけでもないし、俳句の教養は殆どありません」とお伝えして、「それでもよければ」つて出演しました(笑)

西村 寄せられた多くの作品の中から、私が選んだ句についての感想を語って下さればいい、という番組でした。

伊勢 何をお話したか忘れてしまいました(笑)

西村 「夏帽子」と言う題で、伊勢さんは「夏帽子が人生を語り、背景を語っている」そういうことをおっしゃって、「なるほど」と思いました。伊勢さんが映像で伝えたいことは、「ものに語らせる」んだ、と。季語に語らせるというのは俳句のひとつの手法で、夏帽子は夏の季語だから、当然「麦わら帽子」「夏休み」「夏の想い出」等に想像が広がっていく言葉ですよ。伊勢さんの映画も、何でもない野原のヒメジオンのような雑草が揺

れているところをただ撮っているだけ
の様でも、そこから風の音やにおい、
日差し、季節が感じられて、季語の
効果に似ているなと思いましたね。

伊勢 「物語」は「モノ」が「語る」
ことに耳を澄ますということだと思
うので、俳句も映画も「筋書き」と言
うより「物語」なんですね。

世界各国に広まる

「Haiku」の世界

伊勢 ブラブラしながらある瞬間
にモノが語ることに耳を澄ます、私達
の世界では「ロケハン」と言いますが、
俳句では「吟行」と言うんですね。

西村 俳句の題材を求めて、いろ
んな所に足を運びます。

伊勢 吟行を日本だけじゃなく世
界中で、先日も、スウェーデンに行っ
て来られたそうですね。

西村 エイゼンシュテインもそうで
しようけど、外国の人達が日本の俳
句に意外と興味を持ってきている
ことが最近とみに感じられます。今
年はスウェーデンとの国交が150
周年で、「それを記念して国際俳句交
流協会と交流しませんか？」という
ことで行ってきました。俳句を始め

た頃は「私の句は翻訳しても、外国
人には伝わらないだろう、本当の意味
で理解してもらおうことは絶望的だ」
と思っていました。世界で一番短い
詩である俳句、彼らが言う「三行詩」
に興味を持ってきているというのが
意外でした。現在はNHKワールドと
いう世界中に発信しているチャンネル
で『Haiku Masters』という番組に出
演しています。100か国以上の人が
が投稿してきます。「俳句は世界の片
隅の文学だ」と思っていました。世
界中の人達が興味を持っていてい
ることはとても嬉しいですね。今回、
前駐日スウェーデン大使のラーシュ・
ヴァリエさんが芭蕉の俳句982句
をスウェーデン語に訳して、更にス
ウェーデン語の解説をつけた本が8月
に出版されるそうです。

伊勢 芭蕉の翻訳本はいろいろと
出ていますよね？

西村 でも、芭蕉全句をスウェー
デン語に訳したというのは、初めての
ことだと思えます。

伊勢 アメリカは結構盛んで、
ニューヨークの学校でも教えているよ
うですよ。

西村 そうですね。今回ノルウェー

にも行きましたが、ここでは「公立の
小学校で俳句を習って作った」そうで
す。おかしかったのは「Haiku」つ
て日本語で何と言うんですか？」って
訊かれたの(笑)

伊勢 それは面白いですね。

西村 「俳句」って日本語ですよ
と話したら「自分たちは三行詩H
aikuと習っていたから」とおっ
しゃっていました。

伊勢 外国の人は、俳句をどんな
風に乗しまれているんでしょうか。

西村 今回の吟行は日本から二十
数名、句会に参加された現地の人も
日本語が達者だったので、日本語で選
をしました。でも、スウェーデンでH
aikuを楽しんでいる人達は、英語
又はスウェーデン語の三行詩だと思
います。

伊勢 NHKワールドの『Haiku
Masters』はどのようなスタイルです
か？

西村 今はフランス人もロシア人
も、総て英語です。翻訳してもらって
選びますが、一番多いのはアメリカで、
フランス、クロアチアからもいい作品
が多く投稿されます。「フォト俳句」
という形で、写真も一緒に投稿しても

らっています。そうしないとわかりに
くいので……。『Haiku Masters』は
月に1度、30分の番組として放映さ
れていますが、パソコンでも選ばれた
過去の作品が見られます。世界中の
人がHaikuに興味を持ってしてくれ
ているんだなあ、と肌で感じています。

伊勢 日本でももつと広まるとい
いですね。

西村 日本の俳句人口は1000
万人と言われていますが、年齢層が
偏りすぎています。

テレビやラジオでも俳句の番組が
あつて、三天新聞だけでなく経済新
聞や地方新聞にも俳句欄があつて、
全国から毎週新しい作品が投句され
るとい国は、多分他にはないでしょ
うね。ただ、それも高年齢化していま
す。たまに若者の投句がありますが、
やっぱり「型」の文芸なので、ある程
度の修練が必要だと思えます。

伊勢 俳句は、基本的に春夏秋冬
でしょう。それを何百年に亘って言い
回して、それでもまだ尽きずに新しい
作品が生まれているのがすごいですね。

西村 同じようなものができる危
険性があります。それも短詩形の運
命ですが、ふたつとして同じものがな

いというのは面白いですよ。日本語には同音異義語もありますから。

伊勢 春夏秋冬と言っても、日本のようにはっきりとした四季がある国は少ないでしょう。

西村 季節の移り行きが日本と全く違っても、それはその国の気候風土で作ればいいわけで、個性が出て面白く思います。

興味と才能

後押ししてくれた出会い

伊勢 ご自身は、いつ頃どんなきっかけで俳句をはじめたんですか？

西村 本格的にはじめたのは18歳の時です。中学、高校の頃は、石川啄木の短歌に興味を持ったのですが、大学には俳句研究会しかなかったのでそこに入ったのがきっかけです。もともと定型詩にすごく興味を持っていて、クラブ活動として俳句をはじめました。

伊勢 元々は、俳句に限定していたわけではなかったんですね。

西村 どっちにしても短い定型詩が好きで、中学の時に啄木の詩を「素敵だな」と思って、「こういうのなら私にも出来るかな」と思って始めたんです。

です(笑)

伊勢 どんな詩ですか？

西村 「君に似し姿を街に見る時のこころ躍りをあはれと思へ」です。啄木が函館の小学校の代用教員になって、そこで出会った女性の先生に捧げた詩です。啄木は結婚してたけれど、ほのかな憧れと言うか、そんな想いがある詩でしょう？

伊勢 中学生の時にそれを「素敵」と思ったわけですか？

西村 これは私の心を代弁してるわ、密かに憧れている人に似た人を見かけた時にドキッとするでしょ。「こ言うのを、心躍りと言うんだ」ってね。その歌を知ったのは、テレビで菊田一夫の作・演出、当時19歳の現在の松本白鸚、当時の市川染五郎主演で『悲しき玩具』という啄木の芝居で、若き日の八千草薫が演じた憧れの対象である先生に向けて、染五郎が「私が貴女を想って作った歌です」という場面があったんです。1回観ただけなのにその歌は覚えられたしロマンチックないい詩があつて、歌謡曲を覚えるのと同じように短歌を覚えただけですね。

伊勢 中学、高校と啄木だったわけですね。



西村 高校の時文学少女だったの

で、学校で購読していた文芸誌に詩と短歌と俳句を投稿してたんですね。そうしたら、俳句は毎回載ったので「俳句の才能がある」って勘違いしたわけ。多分、高校生で俳句を毎月投稿する人はあまりいなかったんじゃないかしら(笑)

伊勢 それにしてもすごいね。ちよつと褒められたりするとそういうことが長続きするきっかけになったりするんだなあ。

西村 自分の作品が活字になるっていうのが楽しかったんですよ。

伊勢 私は小学校5年生の時に作った詩が全国コンクールで賞をもらって、NHKで放送されてすっかりその気になって、その1か月後ぐらいに、言われもしないのに「お、浮かん

だ」って書いて先生の所に持って行ったら、ものすごい勢いで怒られて……。

西村 え、どうして？

伊勢 「宿題に出した訳でもないのに生意気なことをするな」と。それですごく傷ついて、その後、作文とか詩はもうやらないと思えましたよ。

西村 私は褒められたけど。

伊勢 褒められるか、怒られるか、それによって変わるってことだね。

西村 中学、高校は女子校で、学校で取っていた『いづみ』という真面目な文芸誌に小説、詩、短歌、俳句の投稿欄があって、それに載るたびに国語の先生に見せに行ったら、毎回「すごいね！」って褒めてくれましたよ。

伊勢 そういうことがあると、どんどんやる気になって実際に俳句を作ったり、映画を作ったりしていく

ど、最初の経験で詩がコテンパンに怒られたことは結構根深く残っていますよ。「先生が喜ぶ作文や詩」などがあります。それに合わせて書くような奴が二重丸もらったり、何かのコンクールに出したりね。ある種の教育者が期待する作品というのがあってしょう。そういう意味で西村さんはすごく恵まれていましたね。

西村 本当に幸せな育てられ方をしましたし、その後も大学で出会った先輩、清崎敏郎先生が、生涯の師となり、幸せな出会いがいっぱいあったと思います。

伊勢 褒めるかどうかだけではなく、出会いながら育てられていくというのは、間違いないですよ。

「つぐね」について

伊勢 すごいと思うのは、大学を出てからもずっと続けているところ。女性が結婚したら「昔はやってましたけど」ってなりますよね。でもそれをずっと続けているのはやっぱりすごいと思います。

西村 それだけ好きだったんですね。女性だけではなくて男性も就職

すると俳句どころではないし、女性には例外なく結婚して子どもができる。と先輩達は俳句から遠のきました。句会にも出ていけないわけだし、俳句を作らなくても生きていけるんだと思えましたよ。

伊勢 その前は、俳句を作っていないと生きていけないって思ってたんですか？

西村 いえ、そんな風には思っていませんでしたが、すごく面白くて休みがあれば泊りがけで吟行に行ったり、勉強より俳句の方に熱心になってクラブ活動に専念していましたが、卒業したら俳句はやめようかと思っていたし、それ程好きだとも思っていないんですが、夫の理解があったので続けられたんです。

伊勢 ご主人がよかったんですね(笑)

西村 私の俳句への愛情が強かったということでしょうね(笑) 夫も当時としては非常に新しい時代の考え方だったので、「奥さんだからといってやりたいことを我慢することはない」と言っていました。でも句会に出て行くとする子どもは熱を出すし、察するわけですね。旅行に出かけようと

思うと階段から落ちるし……。そうすると「俳句なんか作っていかなくても、生きていけるんだ」と思ったりした時期はありました。そういう時に、生涯の師である清崎さんが「細々とでもいいから続けなさい、1年休めば取り戻すのに2年、3年休めば6年かかるよ」と言っておきました。その世界で愉しみながら一緒に上達していった仲間がいたことも幸せでした。

伊勢 「俳句がなくても生きていけるかな」と思った時期から、「俳句がなければ生きていけない」という風になったんでしょう？

西村 俳句があつたから生きていられるという時期もありました。

伊勢 それはいつ頃ですか？

西村 夫が亡くなった時、俳句が自分の支えや慰めになりました。

伊勢 ともかく、やり続けるっていうのは多分それなしで思ったり考えたり出来ないという感じになるわけでしょうか？

西村 そのぐらい深入りしちゃったということですね。伊勢さんでもしょう？

伊勢 私は「自分の治療行為として映画を作ってる」と公言しています。映画を作らないで気がふれて人を殺してしまったりしないために、映画を作っているんだ、つて(笑) ともかくのめり込んでやっていたらばもつと上手くなりそうもんだけど……。

西村 「上手くなる」ってどういうことですか？ 世の中には「上手い」人は沢山いるけど、それだけでは満足できないでしょう？ 俳句の世界もそうだけ。



伊勢 さっきの「物語」、モノが語り始めることに耳を澄ませ、そういうことは、映画や俳句を始めた頃も現在も変わらないでしょ、本当に耳を澄ませずということ、きりがいい世界だけど、もつと耳を澄ませばもつと聞こえてくるような気がする。「もつと聞こえる筈なのに」と思いながらやっていくことだと思っなあ。

西村 自分の作品に満足せず、それを一生極めていくんだろう、と思います。

伊勢 何かを表現する、作るということは、作ることで自分を支えていくことも含めて、他の人にどう思われるかということ以上に、「作りたい」気持ちの方が圧倒的に強いんですよね。

伝わる人にだけ伝わればいい

西村 ドキュメンタリーを作り続けて、人の心に届いた時は嬉しいでしょう？

伊勢 「届いたのかな」と思う一方で「届かなかったのかな」と思うことも多いから(笑)

西村 届く人に届けばいい、万人に分かつてもらおうと言うより、分かってくれる人の心に響いたらとても嬉しいことだと思いますね。

伊勢 お客さんが入ってくれなくて……ということも多いけど(笑)よく、歌手の人や役者さんとかが「3日やったら止められない」と言いますね。確かに、生でリアクションがあるというの、すごく力になるでしょうね。

西村 俳句の場合は勿論句集になるということもあります。今まで作った何千、何万の句の中から自分で選んだ選句集もありますよ。

伊勢 何万もあるの？

西村 多作多捨てですから、沢山作って沢山捨てる、さらにその中から最近自分で百句を選んで、短文も入れて本にしましたが、確かに形になるんですよ。俳句の場合は「句会」の場で作った句を何作か無記名で発表して、それぞれが選び「披講」と言って発表します。披講で作品が読まれた時に作者が名乗りをあげるんですよ、毎回評価を受けているようなもので、そういう手応えが句会にはあります。

伊勢 西村さんの句が選ばれないこともありますか？

西村 勿論あります。でも、「ひとりでもわかってくれる人がいればいい」と言う潔さみたいなものがだんだん身につくんですね。伊勢さんの作品も、もつと解説したり字幕を入れたりすれば、誰でもが分かると思います。芸術とはそういうものじゃないと思います。それなりの人生経験を経た人が、感動して涙を流してくれたら、分かつてくれる人に分かつてもらえればいい、という潔さをいつも感じますね。正直なところ、これは想像力が豊かな人でないと分かつてもらえないんじゃないかと心配になりますよ。

伊勢 未だにパソコンが出来ないので、大先輩で、もう亡くなった方に時々直筆の手紙を送っていたら、ワープロで打った活字の返信で「君の手紙は読めない。読めないことに、君の映画の性格がよく出ている。他の人に伝えようとする努力が足りないと思う」と書いてありました(笑)「難しいことを易しく、易しいことを深く、

深いことを面白く、面白いことを真面目に、真面目な事を愉快地、そして愉快なことはあくまで愉快にと続きます」という井上ひさしの言葉があります。易しい事を深く、がおつしやつたことのポイントですよ。

西村 私もそこを目指しています。

伊勢 テレビや新聞がやっている「難しいことを易しく」だけだと、本当に伝わって欲しい事や本当に考えて欲しい事が伝わらなくなったりします。「易しいことを深く」そのことに対する想いをどれだけ深めて言葉にし、又、映画にしていくなかということだと思います。

西村 俳句もそうですね。平易な表現で深く平明であつて深いところを詠め、と教えられてきました。難しい表現を使ったりすると、ちよつとびつくりしたり恐れ入ったりしますが、名句は分かり易く、いろんな世界が想像できるところが深いですね。

伊勢 現在、多くの人が短い言葉で伝えることを志向していますが、短い言葉で強く言うことが、本当のことを伝えるということになっているのだろうか、今の課題として、「言葉」を

ふたり四人 そしてひとりの 葱刻む

検証していく必要があるのではと思っ
ています。「難しいことを易しく、易
しいことを深く」ということを問わな
いのは、ひとりひとりの存在や想像
力を馬鹿にした権力的な発想だと思
います。西村さんは言葉が命で、私は
映像が命です。

西村 言葉に対する責任ですよ
ね。どんな時代でも思想とか政治的
な所とは違う所で生き続けてきてい
ると思います。平安時代や戦国時代
に描かれたものでも感動を覚えたり、
時を超越する言葉の素晴らしさを感じ
ますよね。伊勢さんも、ひとつの主
義主張や政治的な配慮から無縁なと
ころで作品を作りたいと思ってるん
でしょう？

伊勢 わざと外すのではなく、「こ
れはどういうことなのか？」と
じーっと見てる間に、筋書ではなく
物語の方に転んでしまうんです。報
道的な仕事をしていたら報道のひと
つの筋書きを伝えるようになると思
いますね。

西村 それは多分、政治的なもの
や報道等に則した映像とは無縁で、
撮りたいものを撮っておられるわけ
から。

「ワンカット」の俳句 「ワンシーン」の短歌

西村 俳句も多作多捨て何万、何
千作っても、自分の作品として残すの
は氷山のほんの一角だけです。映像も
伊勢さんがどういう基準で残してい
るのか、とても興味があります。

伊勢 それは、映画の神様が「これ
にしなさい」とついでに素直に従って
いるというのが、すごくあります。

西村 本当ですか？でも、意図は
あるでしょ？

伊勢 物語の形が出来てくると神
様が降りてくるんです。俳句にもあ
りますか？

西村 俳句の神様が「これを残し
なさい」と言っはくれませんが、俳
句の神様に味方してもらってると感
じることはあります。でない、17音
のこんな小さなものに50年も執着し
て心を注いで生きてはこれなかった
と思いますよ。

伊勢 西村さんはやっぱり俳句の
神様に寵愛されて、生きてきたん
ですね。

西村 試されているかもしれないま
せんが、それ程自惚れてはいませんよ

(笑) 俳句の神様は確かにいると、こ
二十数年は思えるようになりました。
伊勢 私も、映画の神様がいるっ
て、かなり早い時期から思うよう
になりました。

西村 それはご自身の意思ではな
く、映像の神様の意思だと思います
か？

伊勢 そういう風に言ってる、とい
うことはありますね。要するに、比
べることで成立する仕事ではないと
思っていますからね。

西村 計算や配慮を越えた直感と
か勢いとか、「これでいこう」というよ
うな意思は、確かに自分のものではな
いですね。

伊勢 俳句を使った映画としては
細谷亮太先生の『大丈夫。』がありま
すが、今度は短歌を使った映画を作っ
ています。短歌は五七五七七で、「言っ
てしまう」感があるので俳句の方が
映像的です。

西村 でも、歌人の永田和宏さん
によると「七七」で述べているわけ
ではなく、「五七五」と「七七」が合わ
せ鏡の様になって、ひとつの世界を構
築しているそうです。

伊勢 なるほどね。短歌が作品の

中にどれだけ入るかにもよるけど、ワ
ンカットをパーンと決めるのは俳句の
方が観ている人に残るんじゃないか
な。俳句はワンカット、短歌はワンシー
ン、みたいな感じがするわけ。短歌を
使わなくても「短歌みたいなシーンづ
くりだね」とか、俳句を使わなくても
「俳句みたいだね」と、言われるよう
になってほしい。「どんな映画だったか
忘れたけど、あのカットだけは印象に
残ってるなあ」と、これは映像を観る
喜びですよ。正しくなくても「いい
な」ということはあり得るわけです。

西村 現実の「あるがまま」という
ことね。

伊勢 正しいからいいということ
もないし、美しいからいいという訳で
もない。受け止め手ひとりひとりに
よつても違うでしょう。俳句の価値の
基準ってありますか？

西村 絶対的な基準はありません
ね。選者の主観的なもので、それぞ
れが自分の基準を持っています。例
えば、日本で一番大きな「NHK全国
俳句大会」に寄せられた何万句とい
う作品から絞って何千句かを15人の
先生が選びます。同じ句でも選は重
なりません。最終3句とかになると、

先生毎に違う句を選んでいきます。それは、芸術だからです。自分の体験から「この句はいい」と思っても、価値観も体験も違うので、ある人には分かっても他の人には分からないということもあります。

伊勢 それが面白さのひとつでもあるんですね。

西村 「価値観の多様性」については、これからの世界の人達が学ぶべきものだと思います。外国の方に「日本にはどういう文化がありますか？」と訊かれた時に、「俳句という世界で一番短い詩で、誰でも創造することができ、他人の作品によつてイメージもかきたてられる」と伝えたいです。歌舞伎や文楽、能もありますが、それらは享受するだけです。でも俳句は、あなたも出来るし私も俳句を作っている」と言える文化で、それは日本文化の誇りに思える詩形のひとつだ」ということを、ごく最近になって感じました。それは、外国の人が俳句というものに興味を持ち始めてくれたお陰です。ただ日本での俳句は、年齢層がものすごく高齢化しています。もう少し働き盛りの人や、子育て中の人たちも俳句を楽しんで作ってくれるとい

いな、と思います。

「そのとき」を切り取る

俳句のおもしろさ

伊勢 西村さんが子育て中に作った俳句も、いいですよ。

西村 ありがとうございます。それは人生のその時にしかできない句ですね。親が必死に汗をかいて苦勞して、泣いたり笑ったりしながら生きていく時の本音を俳句で詠まないと意味がありません。

伊勢 昨年、『俳句日記2017 自由切符』という句集も上梓されました。1年間、毎日欠かさずに詠んだ365の俳句に日記形式の短文を添えてまとめたもので、『やさしくなあに』の試写に来てくれた時のことを題材にして下さいました。

「試写室を出て秋霖の街単色」

西村 毎日句を詠んでいても人生のステージでその時しか詠めない句がありますよね。

伊勢 俳句には、子どもの頃から接していたんですか？

西村 俳句ではなく母が短歌をつくっていたので身近なものでした。それよりも、啄木の歌の影響が大きかつ

たですね。

伊勢 若者にもっと知ってほしいですよ。

西村 「俳句甲子園」の選者として十数年関わっていますが、後輩達にも続けて欲しいと思います。環境が変わると作らなくなる人が多いです。句会に出にくい子育て中のお母さん方を集め「ハッソル句会」というのもやっていますが、一番少ないのは働きの盛りの男性の作品です。

伊勢 映画館もシニアが多くて1000円だから売り上げは上がらない。映画全体がそうになっているし、特にドキュメンタリーは高齢者層が多くて若い人が来ないんです。俳句も、俳句甲子園をやっているのだから、20代30代でも持続するのは可能

性としてはあるような気がします。

西村 でも現実的にはそうじゃありませんよね。

伊勢 俳句の五七五の中に様々なものが含まれているのをどう感じてもらうか、今の若い人も、接するチャンスがあつて俳句を身近に感じて、普段着のように付き合えるようになるといいですね。高尚なものという感覚だと入りづらいでしょうから。

西村 俳句は退職後の楽しみではなく、人生の「生活し盛り」の人も楽しめるものですよ、ということをや、多くの方に是非知って頂きたいと思っています。今日はどうもありがとうございます。

伊勢 楽しいお話をありがとうございました。

